

論文 / 著書情報
Article / Book Information

| | |
|-------------------|--|
| 題目(和文) | ガラスレンズとPDMS間の接触における凝着ヒステリシスのメカニズムに関する考察 |
| Title(English) | |
| 著者(和文) | 白斗永 |
| Author(English) | Dooyoung Baek |
| 出典(和文) | 学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10490号, 授与年月日:2017年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:高橋 邦夫,京極 啓史,秋田 大輔,佐藤 千明,齋藤 滋規 |
| Citation(English) | Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10490号, Conferred date:2017/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,, |
| 学位種別(和文) | 博士論文 |
| Category(English) | Doctoral Thesis |
| 種別(和文) | 要約 |
| Type(English) | Outline |

学位論文要約

ガラスレンズと PDMS 間の接触における 凝着ヒステリシスのメカニズムに関する考察

東京工業大学 大学院
理工学研究科 国際開発工学専攻
白 斗永

エラストマーを用いた凝着現象における凝着ヒステリシスのメカニズム理解は現象の予測と応用において重要である。本研究ではガラスレンズと polydimethylsiloxane (PDMS) ブロック間の凝着プロセスにおけるエネルギー収支から散逸を導出し、凝着ヒステリシスのメカニズムを考察した。接触実験では力、接触面積、変位を同時測定し、散逸を評価するために非平衡を考慮した弾性接触理論を用いた。散逸の評価にあたって必要となる凝着仕事と弾性率の推定方法を提案してその有効性を検証した。推定した凝着仕事と弾性率を用いて導出したエネルギー散逸より、接触面積の増減と共に円周状の亀裂全長に一定な散逸力が働くことを発見した。得られた実験事実から散逸に寄与する要因を考察し、一定散逸力の導入による接触現象の予測可能性を示した。

本論文は全 6 章より構成されている。

第 1 章「序論」では、まず、凝着現象を利用したデバイスが注目される背景とそのデバイスの設計には凝着ヒステリシスを含むフォースカーブの予測が必須であることを述べている。また、その予測のためには凝着ヒステリシスのメカニズムの理解が重要であるものの、理論的な検討がなされていない現状を指摘している。そして、本研究の目的が、凝着ヒステリシスのメカニズムの解明を念頭において、弾性体と近似できる polydimethylsiloxane (PDMS) と剛体と近似できるガラスレンズの界面で観察されるヒステリシス現象を理論的に解釈する試みにあると述べ、本論文の構成を説明している。

第 2 章「凝着ヒステリシスを評価するための弾性接触理論」では、凝着ヒステリシスのメカニズムを明らかにする際に最大のヒントとなる散逸エネルギーを実験的に求めるための理論を説明している。回転対称な放物面を持つ剛体を半無限弾性平面に押しつけ引き離す凝着（接触）プロセスを想定し、エネルギー平衡状態が達成されていない非平衡状態で、押しつけと引き離しが行われると仮定している。この仮定により散逸エネルギーの発生要因が接触界面におけるエネルギーの自発的な緩和現象に限定され、この仮定から導かれる接触面に加わる力の関係を実験的に確認しつつ全エネルギーの変化を導出することで散逸エネルギーが評価できることを述べている。

第 3 章「凝着仕事と弾性率の推定方法の提案」では、前章で述べたモデルにおいて、物性値として用いられている凝着仕事と弾性率を実験的に推定する方法を提案している。実際の凝着プロセスにおいてはエネルギー平衡が達成されていないが、接触面積の

増加する状態から減少する状態に転じる瞬間、接触系の全エネルギーが平衡状態を通過することから凝着仕事の推定方法を提案し、凝着プロセスにおける、変位、力、接触径の同時計測と理論式を用いることから弾性率の推定方法を提案している。結果として、全ての測定値において整合性のある弾性率と凝着仕事が推定できることを示している。また、従来の凝着仕事と弾性率の推定方法の矛盾と限界を指摘し、両者による推定結果を比較し、提案手法の有効性を議論している。

第4章「エネルギー散逸の評価」では、まず、実際のガラスレンズとPDMS間の凝着プロセスにおいて、上述のモデルと推定方法で矛盾なく凝着現象が説明できていることを示している。次に、凝着プロセスにおいて外部から与えられた仕事が弾性体の歪エネルギー、計測系の剛性に起因する弾性エネルギー、および凝着仕事に起因する内部エネルギーの間で分配され、各エネルギー間でエネルギーの授受が行われながら凝着プロセスが進行する全エネルギーの変化の様子を導出して説明している。そして、全エネルギーの自発的緩和分が散逸としてカウントされることから、散逸エネルギーを導出しその変化が接触半径に常に比例する特性を示すことを発見している。

第5章「凝着プロセスの予測可能性」では、前章における発見が凝着ヒステリシスのメカニズムを明らかにする上で大きなヒントになるもののメカニズムの断定には至れないことを踏まえ、その特性を記述する1つのパラメータの導入により凝着プロセスを予測できることを示している。本論文では、そのパラメータを、その次元を考慮して散逸力と名付けている。さらに、凝着プロセスにおける非平衡状態から平衡状態へ変化する系のエネルギー自発的緩和過程において、接触系を増加させながら緩和する場合と減少させながら緩和する場合で散逸力が異なり、減少させながら緩和する場合には散逸力が最大押し込み量に依存することを示唆している。

第6章「結論」では、各章で得られた結論を総括している。

(以上)